

共存 —デジタルとアナログ—

a2200919 土屋 満実

> 研究の概要

現代におけるデジタルとアナログの関係性を表現した立体造形を制作する。
現在、あらゆるものがデジタル化し、社会はデジタルに支配されている。そのなかで私は完全なアナログ作業である漆芸に触れてきて、アナログの魅力や必要性を感じた。自分がこのゼミで感じたようにこの作品を通して、多くの人にアナログの魅力を思い出してもらいたい。

> 背景・目的

デジタルはアナログでやってきた作業を簡単にし、複雑な表現も少しの動作で行えるようになった。しかしデジタル化はアナログのもつあたたかみや微妙な表現を同時に失わせ、また多機能すぎて使いこなせず、逆に不便になることもある。その物足りなさや不便さを解消するために社会はアナログに戻るという姿勢はなく、アナログに近いデジタル(例:タッチパネル、電子ペーパー等)を開発するという姿勢である。確かに、デジタルがようやく浸透した社会の中で急にアナログに戻すことはできない。そのためアナログ形式に近づけたデジタルが登場するのもうなずける。アナログのままでもいいもの、デジタル化して成功したもの、融合させてよくなるもの、現代においてそれらの共存が望ましいと考えられる。しかし、工芸のように、いつまでも完全なアナログであるべきものの数は減っている。これでは共存ではなく、アナログが希少価値として生き残っているだけである。この研究は、造形によって、デジタルとアナログの関係性を表現すると同時に、漆という工芸素材を使用することから、あたたかみや迫力、美しさなどアナログ特有の魅力を伝えることが目的である。

> デザインコンセプト

デジタルとアナログの共存

アナログの象徴“木”にデジタル的加飾をした立体造形。

デジタルによってアナログが生成されている瞬間であり、リアルでかつデジタル感の混じった未完成な木(アナログ)と、それを生み出す高度なデジタルの技術を抽象化して表現する。

【使用素材】スタイロフォーム、麻布、エンビ板、漆

【サイズ】横97×奥行90×高さ60(cm)

【技法】乾漆技法・研ぎ出し蒔絵・螺鈿など

> 制作工程

- | | |
|------------------------|----------------|
| 1. アイデアスケッチ | 8. 下塗り |
| 2. スタイロフォームで1/2ラフモデル試作 | 9. 追い錆(へこみ修正) |
| 3. 粘土試作(細部決定) | 10. 中塗り |
| 4. スタイロフォームで原型制作 | 11. 加飾(蒔絵、螺鈿等) |
| 5. 布着せ | 12. 上塗り |
| 6. 目摺り | 13. 摺り漆 |
| 7. 樹皮表現(外側)、下地(内側)各数回 | 14. 胴摺り・磨き |



> 考察・感想

このような大きな作品を作るのは漆以外でも初めてで、1工程にひどく時間と費用がかかったが、少しずつ形になってくると大きな充実感を得た。デジタルでアナログ感を表現することが難しいように、アナログでデジタル感を表現をすることはとても苦戦した。どちらも似せて作るという意味では同じことだが、アナログ素材でものをすることは、本物の木や機械とは別な味わいが加わり、不完全なところも楽しむポイントと感じてもらえればいいと思う。

私は普段、パソコンや携帯に依存していて、常にデジタルに密着した生活を送っている。それとクラフトゼミは真逆の環境で、何の作業をするにもアナログで、ここでしかできないことばかりであった。伝統的なアナログだけの世界では作業の間も引き締まった気持ちで作品に向かうことができ、アナログの大切さを再確認できた。